福生市史刊行に期待する

赤羽根　行雄

この地をいつの頃から福生（ふっさ）と呼び慣わすようになったのか。

神明社や清岩院境内の湧水を意味する「ブッセ」からきたとか、アイヌ人が湖のほとりにつけた「ハッチャ」に由来するとか、東に砂質の丘陵が続き、西に多摩川の清流が帯を引く「阜沙（ふさ）」の意味だ、といった諸説があるらしい。社会の変化や流行に敏感な、新人類の若者がいかにも好みそうなファッショナブルなこの街の名まえが、実は最近につけられたものではないということを、うかつにもこの頃になって私は知ったのである。福生の名の由来を自信を込めて語る記録は失せ、伝承さえもすでにぼんやりとした過去のこととして明確にできないほど古い土地の歴史をもつということに、意外の感がするのである。

長沢遺跡の発掘による調査の結果、遺物や炉址が発見され、縄文中期の人々の生活を語る原始の息吹きとたくましさが甦った。原始農耕や多摩川での漁撈、採集に生活の糧を求めたのであろう。遺跡の発掘の結果は、多摩川の氾濫の爪痕も語っているという。

古代律令時代には、武蔵国には漢人系、朝鮮からの渡来人（高麗人など）が移殖され、都から遠く離れた武蔵国にも農業土木、牧馬、機織など先進技術が導入されて、産業が発展し、高い文化が流入したらしい。その後、雑木林と丈高い草が深く生茂る武蔵野台地は、牧と荘園が広く展開したようだが、この地についてのそれらのイメージも、推測の域を出ない。

『新編武蔵風土記稿』の中で多摩郡十六郷の内に福生郷と記されるころから、この地も、川霧の奥深いベールにつつまれた歴史から、輪郭の比較的明確な歴史像をむすびはじめる。

熊川神社の棟札（正長二年・一四二九）、瑞穂町・阿豆佐味天神社の棟札（文明十四年・一四八二）に福生の名があらわれるのは、編纂したものでない同時代史料だけに重みがある。中世に成立した福生郷は、福生村と熊川村を含み、もともとは鎌倉期後半の自然村落が室町時代に入って郷村として成立したもののようである。後に、しばらくして、八王子の後北条氏、氏照の影響がこの地にも及び、その勢力図の中に位置づけられた。領内の治安を、力をもって確保しようとする二つの「制札」（石川元八家所蔵）には、強力な権力が福生の地にも及んできたことを推察させる。その戦国時代よりも前、鎌倉期以降室町時代までは、秋川流域に勢威をはり、戸倉城に本拠をもった武蔵七党の西党平山氏の出の「小宮氏」と、平将門の後裔のいい伝えをもち、「杣保（そまのほ）」と呼ばれる一帯（青梅を中心とし、その周辺の地域を含む）を領地として治め、勝沼城に本拠を構えていたという「三田氏」がこの福生、熊川を、おそらくは押えていたのであろう。もともと、鎌倉時

代には武蔵国は将軍「鎌倉殿」の知行国であったから、鎌倉政権の直轄財源として重要で、古代以来、国衙を通じて行われていた荘園支配は守護と地頭が配置されたことでますます強力なものになったと思われる。しかし、逆に、鎌倉幕府が誕生した背景には、東国の荘園を中心に叢生した多数の武士団の存在があり、それら古代末から鎌倉期にかけての武士団の活動が福生とどう関わったか興味がある。

いずれにしろ、市内の名刹の創建年代や、多数発見されている死者供養のための板碑の年号などとも考えあわせると、この福生の地の基盤は、鎌倉時代末期から室町時代初頭の時期に据えられたと考えられるのではないだろうか。ただ、青梅や八王子に比して、福生に中世の姿を彷彿とさせる記録が乏しいように思われるのは、大きな在地権力による直接の支配が薄かったからなのか、どうしてなのだろうと、素人の勝手な想像もめぐらしてみるのである。それほどまでに、村の人々の生活はささやかなところから出発し、営農の努力が続けられていたに違いない。

徳川家康の江戸入府以降、福生は幕府の天領（代官支配地）と、旗本の知行地とでおおよそをしめたらしい。圧巻はやはり玉川上水の開削である。困難なこの事業の完成は、多摩と江戸とを結ぶ一大事件だったが、私には、玉川上水が江戸時代の社会のあり方全体を象徴し、集約し、表現しているようにも思え、本誌の連載玉川上水の坂上先生の稿など興味深く読ませていただいた。

ただ、今になってみると、上水のあたりを散歩していても私は不自然な人工物を少しも感じない。それは周囲の自然と融けあい、福生の大切な自然そのものになりきった姿としての玉川上水のたたずまいを感じるからであろう。時が、歴史が、自然と同化するまでに磨きあげた、芸術品にも思えてくるのである。

年貢、桑畑、野菜もの、薪炭、機織、助郷、……多摩川の出水、天保の飢饉、慶応の武州一揆……時代の風はそれぞれに矛盾と停滞をはらんで吹いていたが、そんなときにも寺子屋での庶民子弟の教育は地味に続けられ、のちの「福生学舎」や「熊川学舎」にうけ継がれ、福生発展の基礎を着々と積み上げていた。

明治維新以降、近代・現代に入ってからの福生は、日本の他の村々、地域がたどったと同様、たいへんな変貌を経験している。維新以来の百二十年の変化は、それまでの千年の変化を越えて激しくこの地をゆさぶった。鉄道が開通し、都市化がすすみ、人口が急増した。戦後、陸軍施設が米軍横田基地へと移行したことは、この町の性格を大きく変え、特徴づけた。畑地にどんどん家が建ってゆく。今、現在の変化が最も大きいのではないか、と思えるほどの変貌……。

『福生町誌』発刊からそろそろ三十年近くが経とうとしている。新しく発掘された史料も多いと聞いている。「古い事実」を「新しい事実」がぬりかえる可能性もあるだろう。歴史は詳しければ詳しいほど「真実」に近づけるのかもしれない。しかし、それだけが理由ではない。過去をふり返ってみたとき、歴史がどのように見えるかは、人により、時代によってかわるからである。何を捨て、何を歴史とするのか。今、世界は、未来への

希望と悲観が混在し、いつ、どのようなかたちの破局がくるのかという混迷と不安が渦巻き、序々に広がりつつあるように思える。福生にもその波は押し寄せていよう。そうした状況のもとで、今回の歴史への問いかけの作業が黙々と続けられている。編集に携わっているメンバーの方々には、何としても頑張ってもらいたい。何といっても、市史は市民が共有できる、かけがえのない貴重な文化的財産だからである。どこのページを開いても、土地の先人達が語りかけてくる、どんなに時代を隔てていても親しく対話できる、そう確信している。

『福生市史』の刊行が、市民の心の支えとなる日を心待ちにしている。

（あかばね・ゆきお　多摩高校教諭・加美平在住）

青い目の人形　アミー・アーデル

成田和子

二枚の写真

古びた二枚の写真が見つかりました。

「福生の学校には、アメリカから送られてきた人形があるんだよ。」

と、姉たちから聞いたことのあった「青い目の人形」の写真でした。

人形が送られてから六十年目に当る昨年（六十一年）二月のことです。

実家の土蔵に置かれたまま数十年、紙面は黄ばみ、汚れも付いていましたが、昭和の一つの歴史を伝える写真でした。

縦横が、二十七センチと二十一・五センチの大きさを持つ写真は、クリーム色のしっかりした台紙に貼られており、一枚には、目のかわいい人形が椅子の上に立った姿で写されています。

もう一枚は、講堂（雨天体操場）を使った歓迎式場の様子を撮ったもので、正面には、日本とアメリカの国旗が飾られ、天井からも両国の国旗を付けた紐が何本も張られています。

青い目の人形（アミーアーデル）

福生尋常高等小学校の人形歓迎式（昭和２年）

また、壇上の大きなひな壇には、たくさんのおひな様が並べられ、その前で、福岡精一郎校長先生より、児童代表の六年生田村千代子（現柚井）さんに、人形が手渡されています。

式場の中央には、着物姿の児童が男女に分かれてぎっしりと並んでおり、数人の男の子が驚いた表情で振り向いています。（フラッシュの音にびっくりして……との思い出話も耳にしました）

前方の右側には教職員が、左側の来賓席には、笹本半左衛門さんを始め、青木作太郎、横田寿一郎、木村弁蔵さんなど村の要職に在った方々が並んでおられ、丁重な歓迎だったことの感じられる写真です。

ギュリック博士と人形

昭和二年（一九二七）のことです。

アメリカの子供たちの贈り物として、一万二千七百三十九体の人形が、日本の子供達に送られてきました。

この人形の贈り物は、日本に二十年余り生活したことのある親日家の宣教師シドニー・ルイス・ギュリック博士の力による所が大きかったといわれます。

博士は、大正二年、健康を害して帰国したアメリカで、日本人移民排斥運動が激しくなっているのに心を痛め、原因の究明や、好転への努力をしておられたそうです。

けれども、大正十三年（一九二四）には、遂に、米国議会でも「新移民法」が可決されるなど、事態は日本人移民に門戸を閉ざす方向へと進んでしまいました。

こうした厳しい状況の中で、なおも日米間の友好関係の確立を求められた博士は、米国キリスト教会の有力者たちに働きかけて、一九二六年（大正十五年）には、「世界児童親善会」を起こし、在日中から親交のあった渋沢栄一翁の協力を得て、「人形を贈る」計画を立てられたといわれます。

また、博士は、日本のひな祭りのことや、大正十年に、野口雨情がセルロイド製のアメリカ人形をモデルに作詞した童謡「青い目の人形」が、日本のこどもたちに広く歌われていることも知っていたといわれ、そのために、人形が三月三日のひな祭りの日までに届くようにとの計画が立てられたともいわれます。

この計画を受けて、日本政府は、「国民的融和の一方法として受け入れるように」と渋沢翁に取り組みを託し、外務省はアメリカ人形を関税免除の扱いとし、人形の配布は、文部省が窓口となって行うことになったそうです。

こうして、人形受け入れのために、渋沢翁を中心に「日本国際児童親善会」が組織されたということです。

全米からの贈り物

アメリカでは、世界児童親善会が、全米に人形募集のポスターや手引きの冊子を配布して協力を呼びかけ、人形旅行局を特設し、各地に地方委員会を作ったそうです。

そして、人形をメーカー三社から取り次ぐとか、人形たちのための特別製のパスポートや旅券を用意するなどの準備をしたといわれます。

これに応えて、全米の教会や、日曜学校、公・私立学校、各種青少年団、PTA連合会、地域ボランティアなど、二六〇万人もの人びとが協力したそうです。

子ども達の中には、資金を準備するために、バザーや野外劇などを催したところもあったということです。

そうして、メーカーが作った四十センチ前後の裸人形を購入し、手作りの服を着せたり、名前をつけたり、日本の子ども達への手紙を書いて持たせるなど、旅の仕度を整えて地方委員会に届けたのだそうです。

人形たちは、ニューヨークとサンフランシスコの港に集められ、郵船会社五社の協力で乗船し、一体ずつギュリック博士のメッセージを持って、十二月二十日までに、日本への船旅に出発したそうです。

日本に着いた人形

人形は、サイベリア丸に乗って横浜港に着いた五百体を始め、数隻の船で送られてきましたが、一部は神戸港に着いたといわれます。

昭和二年三月三日、東京の日本青年会館に、東京の小学校の代表児童、渋沢子爵、幣原外相、岡田文相、それに、アメリカのマクベー大使、バランタイン総領事、アメリカンスクールの子供達など関係者ら二千人もの人びとが集って、公式の歓迎式典が盛大に行われ、福生の学校からは、校長先生と、六年生代表の古谷クニ子さん、五年生代表の田村好子さんが出席されています。

田村さんは、その時の様子を、「とても大ぜいの人が集っていたのを覚えています」と言われ、袴をはいて出席されたことも話して下さいました。

この歓迎式には、友情の人形のために作られたアメリカの「人形の歌」が、アメリカンスクールの少女たちによって合唱されたそうです。

「人形の歌」

一、日本のお国の嬢ちゃんと
仲よく楽しく遊ぼうと
桃の節句のお祭りに
お招き受けて参りませう

二、そこでは可愛い嬢ちゃんが
大喜びでほゝゑんで
目をかがやかし心から
おもてなしおばなさるでせう

三、子供同志の仲よしが
だんだん深くなるにつれ
国と国との親しみが
とわに楽しく続きます

また、日本の子どもたちも、この人形たちのために作られた「人形を迎える歌」を歌って歓迎したそうです。

「人形を迎える歌」
文学博士　高野辰之　作詞

一、海のあちらの友だちの
まことの心のこもってる
かはいゝ〳〵人形さん
あなたをみんなで迎えます

二、波をはる〴〵渡り来て
こゝ迄お出での人形さん
さびしいやうには致しません
お国のつもりでゐらっしゃい

三、顔も心もおんなしに
やさしいあなたを誰がまあ
ほんとのいもうと弟と

おもはぬものがありませう

ミス・アメリカを始めとする四十八体の代表人形たちは、荒天のために鳥羽丸の入港が遅れ、三月十四日に横浜港に到着したそうです。

そして、十八日に横浜の本牧小学校で歓迎会が行われ、三月二十六日に東宮御所に参上し、その後、東京博物館（現・国立科学博物館）に飾られたとのことです。

人形は、東京府に五六八体が、また当時領土であった朝鮮、台湾、関東州にも贈られたといわれます。

この親善人形は、小学校と幼稚園に配られましたが、日本全体では、小学校だけでも二万五千校あったとのことですので、配分を受けた学校の喜びや誇りは大きかったようです。

アミー・アーデルさん

福生の小学校でも、人形を迎えての盛大な歓迎式が行われたのですが、その日時については、はっきりしておりません。

現在も人形の残っている檜原小では、五月であったことが、武田英子さんの著書に書かれておりますが、福生では、写真に見る児童や来賓が羽織を着ていることから、もう少し早い三月から四月にかけてではなかったかと考えられます。

学校での歓迎式に、代表として人形を受け取られた柚井さんは、

「担任の先生から、お人形さんの頭の方を少し高くして頂くようにと教えられ、そのようにしました」と言われ、家から、ひな人形や飾りの品を持って行ったことも話して下さいました。

人形について、福生一小九十年記念誌に、「ミス・京子」と題して寄稿されたことのある滝田美子さんは、五年生だった当時を懐しみながら、人形の名前が「アミー・アーデル」であったことを教えて下さいました。

また、歓迎式の様子に触れられ、

「校長先生が、人形は『ママー』となくことを話され、ママというのは、アメリカではお母さんのことだって説明されたんです。

その後、みんなに声を聞かせようとすると、それまで鼻をすする音や、「アー」なんていう声の聞こえていた講堂内がシーンとなって、『ママー』という声が聞こえて来、『ああっ、ないた!!』などという声もあちこちに聞こえて……」と、会場内に広がった感動の様子をくわしく話して下さいました。

更に、始めて聞いた「ママー」という声は感激だったことや、人形がどうしてなけるのか、その構造が不思議でならなかったこと、七段のひな壇に、持ち寄ったおひな様を飾ったことなども聞かせて下さいました。

送られてきたアメリカ人形は、横にすると目をつぶり、起こすと目を開けて「ママー」と声を出す仕組みになっていて、当時の日本の子供たちにとっては、西洋文化の違いが大きな衝撃だったようです。

他の学校でも、こども達が人形をのぞきに行ったとか、さわりたがって先生に注意されたなどという記事が見られますが、福生の学校でも、応接室の中に大切に飾られていたようです。

女の子たちは、応接室の掃除当番になるのが楽しみだったとの話もうかがいま

した。

また、姉の一人は、一年生の時に担任の榊マツ先生が、人形を教室に持って来られて写生させた絵が展覧会で金賞になり、嬉しかったために洋服の色もケープの色も心に残っているとのことで、ピンクの洋服に、ビロード地のブルーのケープを着ていたことを覚えておりました。

日本からも人形使節

アメリカの子どもたちから、かわいい人形を頂いたお礼に、日本からも人形をクリスマスまでに送り届けようと、日本国際児童親善会が、人形を受領した学校や幼稚園に呼びかけました。

そして、こども達からの寄附金、一銭醵金（きょきん）をもとに、専門家に頼んで人形を作ってもらうこととし、各道府県と六大都市及び朝鮮、台湾、関東州の代表人形、それに、皇后さまからの御下賜金で作られた特製の人形「ミス・ジャパン」との五十八体の人形と持ち物とが出来上ったそうです。

人形は、曲尺二尺五寸（約八十センチ）の背丈で、衣裳は友禅縮緬に本金の帯、下着類をつけ、それに草履、駒下駄、傘、箪笥、鏡台などで、一体分が、当時で三百五十円の豪華なものだったといわれます。

人形は出来上ると各道府県へ回送され、子ども達に披露し、送別会をされて、各地で土地にゆかりの名前が付けられました。

東京府では「東　京子」東京市では「東京花子」山梨県では「甲斐絹子」北海道では「北海花子」というように、それぞれ名付けられたのですが、花子や富士子の名前が重なったり、外国の人には発音しにくいものもあったために、すべて、「ミス」を付けて「ミス・東京」とか「ミス・京都」などと呼び変えられたそうです。

人形たちは、昭和二年十一月四日に、日本青年会館での送別式を受けましたが、式の中で、「人形を送る歌」が歌われました。

「人形を送る歌」

文学博士　高野辰之　作詞

一、此の日の国より星の国へ
今日を門出の人形よ
すめるまなこをうるほさず
眉を開きてさらば行け

二、歓び迎へて出す手に
その手を延べよ人形よ
まことをこむる手と手には
笑の花こそつねに咲け

三、我等が心を心とし
さらばとく行け人形よ
波の十日を過さなば
いたる所に春を見ん

人形は、パスポートと、本物そっくりの日本郵船のキップと、子供たちからの手紙などを持って、十一月十日に横浜港から天津丸に乗り、二千五百人の小学生たちに見送られて出港、太平洋を渡って行ったそうです。

そして、十一月十九日にハワイのホノルルに着き、日本人移民の子供たちと、アメリカの子どもたちの歓迎を受けた後、サンフランシスコなどでの歓迎式を受け、更にふた手に別れて各地の歓迎会にのぞ

みながら、ニューヨークに着いたそうです。

ニューヨーク入りした人形たちは、世界児童親善会によって、代表格の人形、ミス・ジャパン（倭日出子）は、ワシントンの国立博物館へ、また日本の各道府県などからの人形は各州の博物館、美術館、図書館など公共の展示施設がえらばれて保存されたとのことです。

福生のこども達を含める東京府の贈った人形は、ヴァージニア州リッチモンド市図書館児童室に、また東京市の人形は、ニューヨーク州ニューヨーク市博物館に贈られたそうです。

歴史の中の人形たち

「世界の平和は子供から」の考えによって計画され、日米間の親善をはかろうとの願いから日本に送られてきた人形たちでした。

けれども、平和への希いは、やがて破られてしまいました。

戦争という悲しい歴史の中で、「人形処分」の示唆が、文部省か軍部かによって出されたといわれ、そのために、焼かれたり壊されたりの運命をたどったものが多いそうです。

また、幸い無事だった人形も、戦後の校舎改築や、移転、整理などの折に処分されたり、失われたりして、現在では、二百体足らずしか残されていないそうです。

福生の学校に送られてきた人形、アミー・アーデルさんの姿も今はなく、目にすることはできませんでした。

また、当時勤めていて、写真を保存したと思われる叔父もすでに亡く、往時を尋ねる術も有りません。

時の流れは、厳しい現実となっております。

けれども、青い目の人形アミー・アーデルさんが、昭和初期の福生にあって、こども達をよろこばせ、海をへだてた国アメリカへの夢をはせさせてくれていたことは、思い出を語る方々のお話の中からも、二枚の写真の中からも温かく感じられて、福生の歴史の一片に触れることができたのでした。

（なりた・かずこ　元第一小学校教員・福生在住）

参考資料

武田英子著　「青い目の人形」　山口書店
〃　「青い目をしたお人形は」　太平出版社
〃　「青い目の人形メリーちゃん」　小学館
朝日タウンズ　昭和五十年十二月二十日
朝日新聞　昭和五十八年十一月十一日（朝）
昭和五十九年九月十四日（夕）
昭和六十一年二月五日（夕）
昭和六十一年八月七日（朝）